慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『保元物語』形成の一側面：多近久と仁和寺
Sub Title	
Author	須藤, 敬(Sudo, takashi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.11- 19
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0011
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『保元物語』形成の一側面

——多近久と仁和寺——

須藤　敬

『保元物語』の成立事情について、従来、様々な角度からの指摘がなされてきた。それらの研究の中で、『保元物語』の中の重要な一説話とみなしうる崇徳院配所説話について、その成立の場として仁和寺にいち早く注目されたのが水原一氏であった。[1]この仁和寺は、『平家物語』とも密接な関りがあると考えられており、また歌壇史においても覚性法親王から守覚法親王の時代にかけて、仁和寺歌壇というものが想定されているなど、院政期から鎌倉時代にかけての文学状況を考える上で看過しがたい場といえる。

小論は、従来の研究に導かれながら、いわゆる仁和寺文化圏と『保元物語』の関りについて、多近久という人物を中心に考察を試みるものである。

一

『保元物語』には諸本を通じて、多近久なる人物が、二つの場面において登場している。金刀比羅本[2]によってそれらを示すと、まず上巻「左大臣殿上洛の事」には、

新院武者所親久をもって内裏へ御書あり。やがて御返事あり。かさねて院より御書あり。今度は御返事なし。何事にてやありけむ、子細をしる人なし。

とあり、合戦直前、崇徳院方と後白河天皇方との間でかわされた御書の使いの役として、その名を見出すことができる。名前の表記を金刀比羅本では「親久」とするが、半井本[3]、鎌倉本[4]では「近久」としており、また他の諸資料などから、以後、小論では「近久」で統一することにする。また、新院と主上との間でかわされた書状の内容については、古活字本が載せており、それは、互いに相手の非を言い、難詰するというものである。

もう一つの場面は、中巻「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」の中で、近久が敵状視察にいく場面である。

さるほどに内裡より只今討手のむかふをば、左大臣殿露も思召よらせ給はず、武者所親久を召て、「内裏には兵を此方へむけられ候べきか、又是より兵を待るゝか、急度伺てまいれよ。」とて、御厩の御馬を給ひけり。親久鞍をくに及ず、ひたと乗て罷出ぬ。いくほどなくやがて馳かへりて馬より飛下、「あな、おびたゝし。雲霞のごとくに官軍むかひ候。」と、息をつぎえ

ず申もはてざりければ、西の河原に時をどっとつくること三ケ度なり。御所中の兵共、上を下に返してあはてさはぐ。

金刀比羅本以外の諸本もほぼ同様の記述であるが、半井本では、

近久ヤガテ走帰テ既ニ今寄ラレウズルニテ候也兵共馬ニ乗候ツ義朝只今ハツフリカケテ黒馬ニ黒鞍ヲキテ手打カケテ向候ト申モ終ヌニ西面ノ川原ニ時ノ声ヲ作テ押寄ヌ

と、義朝の姿まで近久が報告している様子が描かれている。

新院と主上との間の重要な書状の使いといい、合戦の火ぶたが切られる場面の臨場感といい、これら二つの場面の描写が『保元物語』で語られている背景には、近久自身による積極的な働きかけがあったと推定できるのではないだろうか。

さて、この近久であるが、古活字本が[5]、

是は伶人の近方が子也

と記すように、多近方の子で、『楽所補任』によれば、天治元年(一一二四)に生れ、建保元年(一二一三)、九十才で没している。多氏は左方舞人狛氏に対し、右方舞人として大内楽所を構成、世襲した家柄で、宮廷神楽を相承していた。楽書の類はいうまでもなく、『今鏡』や『古事談』『古今著聞集』等にもしばしばこの一族の名を見出すことができ、また読み本系『平家物語』でも神楽の秘曲を伝えている一族として評価されている[6]。さらに、その芸能をもって政治的局面に介入することもあるなど[7]、貴族社会の中において重要な職掌を果たしていた。こうした一族に生まれた近久は、幼い頃より芸能の手ほどきを受けていたようだ。『古今著聞集』第六「大神元政秘曲を多近方に伝授の事」では、多近方が、まだ小童である近久を大神元政の前で舞わせたことが記されている。しかし、その後の近久は宮廷芸能の徒としての道をそのまま歩んだわけではなかった。『雑秘別録』[8]の「採桑老」の項には、

多氏にたゞ一すぢあり、近久好方をとどひにちかひさは十年ばかりがあにてありながらひさしくみちにいらず、

と記されている。『楽所補任』によれば、近久が楽所に入ったのは保元三年(一一五八)で、楽人としての本格的スタートはこの時点からと考えられる。では、この時まで近久は何をしていたのであろうか。経緯は明らかではないが、近久は崇徳院の武者所にいたのである。『神楽血脈』[9]には次のような注記がなされている。

近久崇徳院御時候武者所遷御讃州之後入楽所

『多氏系図』にも近久が崇徳院武者所にいたことが注記されており、保元の乱の折には、崇徳院のそばにいたものと考えられる。従って『保元物語』に語られるような出番もあったのであろう。そして、この近久登場の場面が『保元物語』の主要五系統といわれる諸本[10]すべてに見出せる点に、『保元物語』の形成において近久自身の存在が重要な意味を持っているのではないかと推定できる。そして、もし近久自身による保元の乱に関する「口語り」のようなことがあったとするならば、それにふさわしい場として仁和寺が浮び上るのである。次に、近久と仁和寺との関りについて見ていきたい。

二

『神楽血脈』の近久の項をみると次のようになっている。

——近方——近久——仁和寺二品法親王
　　——権律師隆憲
　　——證圓童名金剛丸

—右近少将通能
—三位中将維盛
—泰通卿
—顕家
—家俊

近久と神楽の師資相承の関係にあった人々としてまず仁和寺二品法親王の名があがっている。これは守覚法親王のことであるが、守覚法親王は、芸能に対し造詣の深かった人として知られている。たとえば『守覚法親王集』[11]には、

ありし世にかきをきたりし文ともなとこそはかなきかたみともなるへけれと思ひてとりよせてみれは、横笛の譜神楽催馬楽風俗の譜とも、又声明法則までも、いたらぬくまなくゝらからすしたゝめをきたるさま、末の世のたから此道の鏡かなとためしなくみゆるにつけて、おしさもひとかたならて

苔のしたに笛の音までもうつもれてたゝ名はかりそ世にとまりける

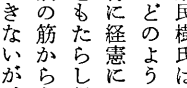
といった詞書をもつ歌を見出すことができる。守覚法親王が近久を仁和寺に呼びよせ、そこで神楽を習う機会もたびたびあったものと思われる。『続教訓抄』巻十一上には、次のような話が載っている。それは近久が守覚法親王の使いとなって大神宗賢とその叔父である僧明賢の仲をとり結び、宗賢は明賢から秘曲を授かることができた。しかし明賢の死後、仁和寺舎利会の場において、宗賢が明賢をなじるようなことがあったので、近久がそれをいさめた、という話である。ここにも近久と仁和寺守覚法親王との関係をみてとることができるであろう。守覚法親王の『左記』には、義経を仁和寺に呼んで合戦の話をさせたことが記されており、それが『平家物語』の成立に何らかの関与をなしているのではないかと考えられているが[12]、近久からも義経の場合と同様に保元の乱の話を聞き、それを書きとめるようなことがあったと推測することもできるのではないだろうか。

次に『神楽血脈』に名のあがっている人々で、特に保元の乱との関りから、権律師隆憲なる人物に注目してみたい。隆憲は仁和寺の僧で、『仁和寺諸堂記』[13]の菩提院、相応院の項に、その名を見出せる。また『血脈類集記』第七には、守覚法親王の灌頂の弟子としてその名があがっており、そこには次のように記されている。

亮僧都、蔵人入道藤経憲息、承元二年六月三日卒、年五十七

ここで注目すべきは、隆憲の父、藤原経憲は、保元の乱の中心人物の一人である藤原頼長の家司の一族の者であり、『保元物語』にも登場しているという点である。この一族を『尊卑分脈』より抄出すると次のようになる。

—盛実
　—顕憲　従四位下・少納言　皇后宮亮左少弁　母三河守源頼国女
　—盛憲　正五下　少納言　保元有事　出家配佐渡国　二条院御時　被召返
　—憲親　従五下　皇后権大進　母安芸守尹通女
興
—律師千覚
—女子　知足院殿妾　左大臣頼長公母



この一族は、盛実女が頼長の母であったことから、顕憲、盛憲、憲親、経憲と、皆頼長の家司を勤めており、[14]保元の乱の折も頼長のそばにいた。そして保元の乱の後、頼長の死をみとり、朝廷に報告をしたのもこの人々であった。原水民樹氏は、『保元物語』の頼長の死についての語りに、この一族がどのように関っていたのかを細かに検証されているが、その中で特に経憲について、「頼長の逃避行に関して最も信憑性の高い証言をもたらし得る人物は経憲であったようだ。勿論、忠実のもとには別の筋からも頼長の死にまつわる逸話が持ちこまれた可能性は否定できないが、最も詳細で最も信憑性の高い情報はやはり経憲のもたらしたものであったろう。」と指摘されている。[15]

また隆憲周辺の人に賢清という仁和寺の僧がいた点にも注意したい。『血脈類従記』によると、賢清は隆憲が守覚法親王から灌頂を受けた時の色衆となっており、賢清自身も守覚法親王の灌頂の弟子で、賢清が灌頂を受けた折には、隆憲がその色衆となっている。この賢清も隆憲と同様に、保元の乱で敗者の側になった人の子なのである。賢清の父は右馬権頭藤原実清という人で、崇徳院の近臣で『保元物語』にも登場しており、保元の乱の後は経憲と同様に配流となっている。賢清は後に守覚法親王の主催した『御室五十首』の作者の一人になっており、[16]守覚法親王とは親しい間柄であったと考えられる。

以上のように保元の乱で敗者となった人の子と守覚法親王の結びつきに、多近久が密接に関っていることを考えた時、ここに保元の乱を語る場としての仁和寺の一つの様相が浮び上ってくるように思える。次に、多近久と守覚法親王が神楽という宮廷芸能を媒介に結びついているということをポイントとして、『保元物語』の中のいくつかの説話との関りについて考えてみたい。なお『神楽血脈』の三人目に名のあがっている「證圓童名金剛丸」[17]も仁和寺の僧であることをここでは付け加えておきたい。

三

『保元物語』の崇徳院配所説話は、いくつかの話から構成されているが、その中の蓮如の配所訪問説話についてみていきたい。この話の概略は次のようなものである。

蓮如は在俗時、陪従として宮廷の御神楽などを勤めていたが、今は出家している。配所の崇徳院に会いたいと思い讃岐まで行き、御所の周辺で笛を吹いていると、御所から人が出てきたので、

朝倉や木の丸殿に入りながら君にしられで帰るかなしさ

という歌を詠じ、崇徳院に取りついでもらう。すると崇徳院から

朝倉を只いたづらに帰すにも釣するあまのねをのみぞなく

という返歌がわたされ、蓮如はそれを手にして泣く泣く都へ上った。

諸本間において話の大筋は変らない。また『保元物語』以外にも長門本『平家物語』、『源平盛衰記』や『発心集』『十訓抄』にも見

出せる話で広く流布したものと考えられる。しかし、それぞれの作品、諸本によって蓮如の俗名がまちまちで、出家後の名も微妙に異っており、また諸史料からも該当する人物を見出せないので、事実譚であるか否かはわからない。そこで物語そのものの記述に頼ることになるわけだが、この説話の骨格として次の三点を押さえることができる。蓮如が在俗時は陪従身分であり、宮廷の管絃に携っていた人物であること。配所の周辺では笛を吹いたこと。崇徳院と和歌のやりとりをしたことである。そしてこれらは互いに不可分の関係にある。まず蓮如の詠んだ和歌は、神楽歌「朝倉」に依っており、まさにもと陪従であった者が詠む歌としてふさわしいものと考えられる。

朝倉や木の丸殿に我が居れば　我が居れば　名告りをしつつ行くは誰

という神楽歌「朝倉」の詞章を取り入れた歌は古来多く詠まれており、それは「木の丸殿」によって山中のわび住いを示し、そこに何ものかが名告る。または訪ねてくるという内容を持つ。それは『十訓抄』第一―二「天智天皇の木の丸殿朝倉やの御歌」に伝えられている伝承を背景としている。それは、天智天皇が世に慎しむことがあり、筑前朝倉の山中に丸木の御殿を造って住み、用心のため参入する者には必ず名告りをさせた、というものである。『新古今和歌集』には、巻十七雑中の最後に、天智天皇御製として、

朝倉や木の丸殿にわがをれば名のりをしつつゆくはたが子ぞ

という歌がとられている。この巻十七雑中は、山家、閑居の歌が配列の中心となっており、続く巻十八雑下は、菅原道真の流罪地筑紫での嘆きの詠と伝えられている歌群からはじまっている。こうした点からも「朝倉や木の丸殿」の詞章には、都を離れた寂しいわび住いを感得する共通理解があったものと考えられる。蓮如の歌も、そうした理解の上で詠まれたもので、配流者崇徳院を訪ねる歌としてはきわめて適切なものといえよう。さらに蓮如が配所の周辺で笛を吹いて歩きまわる描写も、神楽「朝倉」の実際の演奏の様子を連想させるものと考えられる。なぜなら神楽「朝倉」は『教訓抄』巻八によれば、

笛許ニテ吹

曲であるからである。

以上のように蓮如の説話は事実譚ではないとしても、説話の享受者にとって相当なリアリティを感ぜしめたであろうと思われる。そしてこの説話の成立を考える時、神楽の徒であり、実際に保元の乱に参加した多近久の存在、及び和歌圏としての仁和寺に注目してみたいのである。蓮如の俗名についてはいくつかの伝えがあるが、その中で長門本『平家物語』が俗名を「小河の侍従隆憲」としているのは、何らかのつながりがあるかもしれない。また、既に水原一氏が指摘された[18]ものだが、『覚性法親王集』[19]に、次のような歌のやりとりがある。

れいならすをはする御とふらひにまいりあへりけれは、さうしをへたてたるところにおの〳〵よひいれ給て、なくさみぬへきわさなんありなんや、とのたまはせけれは、あさくらをうたひあひたりけるか、いみしくおほえたまひて、こゝちもをこたり給にけれは

あさくらをきくに心もすゝしくてかみのめくみにあふこよひかな

御かへし　　前大納言実定

あさくらやかみのめくみのかひありてかへす〳〵もきみはちよませ

前左衛門督公光

かしこくもなのりしてけりあさくらやきのまろとのゝちかきあたりに

左大弁実綱

源はいつれもをなしのりなれは神のめくみにあふそことはり

覚性法親王に返歌した実定、公光、実綱の官職名から、このやりとりは覚性法親王の最晩年で、崇徳院崩御の五年後である嘉応元年（一一六九）のものであることがわかる。病気でひき籠っている覚性法親王のもとを実定、公光、実綱の三人が訪れ、覚性法親王を慰めるために神楽歌「朝倉」を歌った時になされた歌の贈答は、いずれも神楽歌「朝倉」をふまえたものであり、その雰囲気が蓮如説話と似ている点で興味深いものである。さらに覚性法親王を訪ねた三人の人物が、皆閑院家の人々である点に注意したい。閑院家は崇徳院や覚性法親王の母である待賢門院を出した家であり、また実定の祖父実能が建立した徳大寺が仁和寺内にあることなどから、覚性法親王とは親密な間柄であったと考えられる。歌壇史的にみても、閑院家は崇徳院歌壇の重要な構成メンバーを多く出しており、公通、公重、実能、実行などは崇徳天皇内裏歌壇の常連であった。[20] しかし崇徳天皇譲位から保元の乱以降にかけて閑院家の人々が宮廷歌会においてあまり見出せなくなり、そのかわりに仁和寺歌壇と呼びうるような覚性法親王を中心とした歌人の集りに閑院家の人々が多く登場してくる。[21] そして後に元暦元年（一一八四）崇徳院供養の社を建立する際には、その奉行としてこの閑院家の人々が候補にあげられているのである。[22] 一方、『今鏡』などによれば、閑院家には、今様や神楽の名手が多かったことが知られる。『神楽血脈』にも閑院家の人々の名があがっているが、特に実定は近久弟の好方と師資相承の関係にあった。

和歌を愛好した崇徳院について語られる場として、和歌のサロンであり、しかも崇徳院ゆかりの人々が集まる仁和寺は、もっともふさわしい場所だったのではないだろうか。さらに仁和寺は芸能の場でもあった。楽書の類には覚性法親王の頃から仁和寺において、様々な芸能の会が催されていたことが記されている。そこで音楽を奏する者は、宮廷楽人のほか『教訓抄』によく見出すことのできる「御室の坊官僧」などであり、植木行宣氏はそのことについて、「仁和寺坊官には楽舞堪能の者が多かった。[23]」と注されている。以上のように、和歌のサロンでもあり、芸能の開催される場でもあった仁和寺は、まさに山田昭全氏が指摘されるように、軍記物語の中の詩歌管絃にまつわる説話の発生母胎に比定しえるのである。[24]

四

続いて『保元物語』の中からもう一つ説話をとりあげてみたい。それは師長秘曲伝授説話である。鎌倉本によってその概略を示すと、保元元年（一一五六）八月三日、頼長の子息兼長、師長、隆長、範長禅師等は、それぞれの配所へ向った。それらの中で師長は「管絃の達者」であり、その配流にあたり箏の弟子である「陪従源式部大夫惟成」が「河尻」まで追って見送りにくる。師長はその志に感じて秘曲「蒼海波」を惟成に伝授、その折に、

教おく是を形見と思はなむ身は蒼海のなみになかれむ

の一首を詠じ譜の奥に書き付けた。惟成はその譜を懐中に入れ、涙を押さえて見送った。そして最後に「哀に艶様にぞ沙汰しける」と結ばれている。

この説話は『保元物語』諸本のほか、和歌集、説話集、楽書などにも多く見出すことができるが、師長を見送った人物名、楽器の種類、師長の詠じた歌の歌句等について、それぞれの伝承に相違がある[25]。ここでは一応、鎌倉本の記述に沿って論を進めていきたい。

さてこの説話は一種の芸能佳話とも見なせるわけだが、それでは、どのような場所で、どのような人々によって語り出されたのであろうか。まず予測しうるのは、師長が管絃の名手であるがゆえに、宮廷の管絃者によって語りつがれていたのではないかということである。『保元物語』には、師長が配流の際、祖父忠実へ送った書状について語られているが、その書状がそれのみ単独で『体源抄』巻十一ノ末に「妙音院配流ノ時御消息歟」として載せられていることも、師長関係の話の語り手を考えていく上での参考になるであろう。そして、師長を追って見送りにいった惟成が多近久とは宮廷での管絃の催しに、しばしば同席しているのである。記録または楽書から両者が確実に同席している機会を以下に列挙しておく。

- 『兵範記』仁安二年十二月四日、内侍所御神楽
- 同、仁安三年十二月四日、内侍所御神楽
- 同、仁安四年一月二十日、石清水臨時御神楽
- 同、嘉応元年十二月七日、内侍所御神楽
- 『体源抄』巻十三、「代々公私荒序所作事」、承安二年九月二十五日、法住寺殿舞御覧荒序

これらの記事に、惟成は地下の陪従、召人として、近久は近衛の召人として、どちらも専門の楽人の中にその名を見出すことができる。両者が同席した機会は、実際には他にも多くあったものと推定できる。また『神楽血脈』に名のあがっていた「右近少将通能『泰通卿』」も、今あげた管絃の催しにたびたび同席し、何らかの楽器を奏している。

次に『十訓抄』[26]第四―九「蒼海波と青海波との論」にみられる師長秘曲伝授説話についてみてみたい。それは次のように書き出されている。

九条殿、右大将にておはしましける比、讃岐の三位のむこにとりて、あつかひきこえけるに、常に和歌の沙汰有けり。清輔朝臣参て、物がたりの次に、「一日顕昭法師語侍しは、土佐大将流されたまひける日、陪従惟成道に参りたりけるに、蒼海波といふ秘曲をゝしへ給ふとて、

をしへをくことをかたみにしのばなむ身はあをうみのなみにながれぬ

とよまれて侍ける。管絃のみならず、和歌も優にこそ侍つれ。」と云いだされたりけるに……

この『十訓抄』の記述から、師長秘曲伝授説話を清輔や顕昭といった人々が語っていたことがわかる。そしてこの『十訓抄』の話は「九条殿、右大将にておはしましける比、讃岐三位むこにとりて」という記述から、兼実が右大将に任じられた応保元年（一一六一）八月十九日から、兼実を女婿とした讃岐の三位、すなわち藤原季行が没した応保二年（一一六二）八月二十二日の間のことと考えられる。師長秘曲伝授説話を伝えるものの中で、もっとも古いと考えら

れるのが永万元年（一一六五）頃の成立の『続詞花和歌集』[27]であるから、それ以前に、今あげたような人々が、『十訓抄』に伝えられているような状況で、この師長秘曲伝授説話を享受していたのは興味深い。また『十訓抄』では、先に引用した部分以降で、「青海波」と「蒼海波」のどちらが曲名として正しいかの議論となり、「あるじの三位」が琵琶の師を呼びよせ、その議論に結着をつけたことが述べられている。従って『十訓抄』の話の舞台は季行の邸とみなせるが、この季行、そしてその息定能が、どちらも『神楽血脈』によれば、季行は多近方から、定能は多好方から神楽の秘曲を伝授されているのである。特に定能は『尊卑分脈』にも「神楽秘曲相承一流也」と注記されており、先に列挙したような宮廷の管絃の催しに多近久や惟成と一緒に加わっている。

以上のことから、師長秘曲伝授説話は、宮廷の楽人、管絃者達によっていち早く語られていたものと思われる。一方、説話の中に和歌があることによって、清輔や顕昭のような歌人も、この説話の享受圏にくみこまれていったのであろう。そして清輔、顕昭に関しては、既に指摘されているように、覚性法親王及び守覚法親王のもとに親しく出入りしていた[28]ことに注意しておきたい。

五

以上、蓮如説話、師長秘曲伝授説話と『保元物語』の中の二つの詩歌管絃にまつわる話について、それらがいわゆる仁和寺文化圏といったものに関っていた宮廷芸能の徒や歌人達によって、広く支えられ語り出されてきたのではないかということを考えてみた。そして、個々に語り出されたそれらの説話が、一つの物語にとりこまれていく過程において、それらの説話に物語の中では直接関ってはいないが、まったく違う場面においてその存在を確実に主張している多近久に注目してみた。兼実は近久について次のように記している。『玉葉』文治元年（一一八五）十一月十八日条

件近久左内両府近習者、凡日本第一京童又能聞秘事云々

この時、近久は既に六十才をこえているが、近久のひととなりを知る上で参考となろう。同時にここには、多近久のような人物、すなわち芸能の徒の一つの属性が現れているように思える。軍記物語形成における芸能の徒の果たした役割については、芸能の徒そのものの属性などからより詳細に検討していく必要があるように思う。さらに小論でとりあげた二つの説話についていえば、それらが『保元物語』全体の構想の中では、どのような意義を担わされているのか、そしてそこに多近久のような人物が関ってくることの意味は何なのか、ということを考えねばならない。こうした点については、機会をあらためて考察してみたい。[29]

注1　水原一氏「崇徳院説話の考察」（『駒沢国文』七号、昭和四十四年六月）
2　日本古典文学大系本、以下同じ
3　古典研究会本、以下同じ
4　古典研究会本、以下同じ
5　日本古典文学大系付録
6　延慶本『平家物語』第六末二十四「内侍所温明殿入セ給事」
7　河音能平氏「ヤスライハナの成立」（『中世封建社会の首都と農村』）
8　群書類従
9　続群書類従
10　半井本・鎌倉本・京図本・金刀比羅本・流布本をさす。栃木孝惟氏『日本古典文学研究必携』保元物語の項、なお鎌倉本は中巻を欠く

め近久登場は一回である。

11 私家集大成
12 山下宏明氏「平家物語の成立と流伝」（『日本文学全史3、中世』）
13 真言宗全書
14 橘本義彦氏『藤原頼長』
15 原水民樹氏「頼長の死を語る男たち―保元の乱伝承考」（『国語と国文学』昭和五十九年八月）
16 久保田淳氏「『御室五十首』について―俊成・定家・家隆を中心に―（上）」（『国語と国文学』昭和四十二年五月）
17 證圓は村上源氏定季の息で、仁和寺の阿闍利である。童名金剛丸については『教訓抄』『吉野吉水院楽書』等に、北院御室の御寵童としてその名を見出せる。
18 注1に同じ
19 私家集大成
20 松野陽一氏「崇徳天皇内裏歌壇資料集成」（『藤原俊成の研究』）
21 西村加代子氏「仁和寺和歌圏と顕昭―覚性法親王時代における―」（『国文論叢』昭和五十七年三月）
22 『吉記』元暦元年四月一日条
23 植木行宣氏『教訓抄』頭注（『古代中世藝術論』）
24 山田昭全氏『平家物語研究事典』仁和寺の項
25 師長秘曲伝授説話については、原水民樹氏「師長秘曲伝授譚小考―鎌倉本『保元物語』の性格への言及―」（『徳島大学学芸紀要』昭和五十四年）、安田洋子氏「全刀比羅本『保元物語』の一考察―師長秘曲伝授の説話をめぐって―」（『軍記と語り物』二十一号、昭和六十年三月）が詳細な検討を加えておられる。また師長を見送った人物について竹鼻績氏『今鏡全訳注』も考察を加えておられる。
26 岩波文庫本
27 『続詞花和歌集』巻十四、別、六九四番（『新編国歌大観二巻私撰集編』）
28 久曽神昇氏『顕昭・寂蓮』
29 拙稿「『保元物語』配流者説話について―数奇と王法意識に関らせて―」（『藝文研究』四十七号）